

2018年12月9日(土)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミランさん アウトプットイベント

「デジタル発和書の旅 ひるがえる和歌たち—扇と翻訳で古都に遊ぶ—」

1. イベントの概要

TIRのピーター マクミランさんが、ないじえる芸術共創ラボのなかでどのような取り組みをしておられるのかを広く知っていただき、様々な視点を持つ方々と一緒に和歌の翻訳について考えるために、アウトプットイベントを行うことにしました(2018年12月9日、於有斐斎弘道館、共催:有斐斎弘道館、後援:京都市、協力:凸版印刷株式会社)。鳴子、立川での開催に続き、凸版印刷株式会社さんとの共同イベント「デジタル発和書の旅」シリーズです。

タイトルの「ひるがえる和歌たち」は、今回のテーマである翻訳の【翻】と、マクミランさんが翻訳に取り組んでおられる『扇の草紙』にちなみ、扇が【ひるがえる】様子を掛けたものです。

今回の会場は、京都市にある有斐斎弘道館。江戸時代を代表する儒者・^{みながわきえん}皆川淇園(1734-1807)が創立した学問所を受け継ぐ歴史的な場所です。そんな素晴らしい会場に、百人一首を研究しておられる吉海直人先生(同志社女子大学教授)よりお借りした、多様な百人一首カルタ全十首を展示し、様々な角度から和歌文化を楽しんでいたかこうという趣向です。

参加無料

デジタル発 和書の旅

ひるがえる
和歌たち

扇と翻訳で古都に遊ぶ

平成30年
12月9日(土)

14時開演 [13時30分開場
16時30分終了予定]

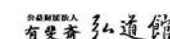
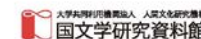
【会場】有斐斎弘道館

その歌の魅力? — 扇の草紙の翻訳
ピーター・マクミラン氏、小山 隼子氏

扇はどちらに翻るか — 百人一首で遊ぶ
ピーター・マクミラン氏、太田 達氏、ロバート・キャンベル氏
パワエティに富んだ百人一首カルタを併せて展示いたします

登壇者

 平成30年度 国際学術交流員 特別招聘 ピーター・マクミラン	 京都大学文学部 言語学専攻 ロバート・キャンベル	 京都女子大学 文学部 小山 隼子	 京都市立 文学部 太田 達
--	---	---	--



2018年12月9日(土)

↓百人一首カルタ展示の様子



↓一円玉と同じサイズの雛カルタ



¹ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200015700/viewer>

2, 第1部—その和歌の魅力は?—

マクミランさんが英訳に取り組んでおられるのは、和歌と絵画が融合した作品『扇の草紙』—和歌と、それに関する絵画を扇型の画面に収めた作品群—です。当館には数点の美しい『扇の草紙』が所蔵されていますが、マクミランさんはそのうち、屏風に仕立てられた『扇の草紙』¹と、卷子本仕立ての『阿不幾集』²を扱っておられます。

普段のワークショップでは、和歌を専門とする研究者とともに、文化的な背景への理解を深めつつ、和歌の解釈を検討し、より良い英訳を考えています。

第1部では、鎌倉時代の和歌を専門とする小山順子先生(京都女子大学教授)にご登壇いただき、解釈が分かれる和歌や、英訳に工夫が必要な和歌について、ご来場のみなさまとともに検討しました。



←凸版印刷(株)が新たに開発した画像ビューアーを活用。

² <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200006812/viewer>

2018年12月9日(土)

2-1, 詩として成り立たせるには？

まず、日本語の和歌(韻文)を、英語の詩に作り替えるということについて、「かささぎ」の歌を例に取り上げました。

かささぎの 渡せる橋に 置く霜の 白きを見れば 夜ぞ更け
にける

(阿不幾集/出典:新古今和歌集・冬・大伴家持、百人一首)
鶺鴒が翼を広げ架け渡した天の川の橋の上に置いた霜が、白く冴えているのを見ると、夜も更けたのだなあと思う。

「扇の草紙」は和歌と絵画で成り立っており、中には謎解きを楽しむものもあります。この例はそのひとつで、傘と鶺鴒と一緒に描かれており、「かさ」と「さぎ」で「かささぎ」という思わず笑ってしまうような言葉遊びを絵で表現しているのです。



この和歌の翻訳については、以前鳴子で行った「デジタル発和書

³ 古典インタプリタ日誌はこちらから

→https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary_contents/event_300309

の旅 湯とアートが鳴子で出会う」³ (2018年3月9日)でも試みていますが、その時には本来黒い鳥であるはずの「かささぎ」が白く描かれるのは何故か、ということが論点になり、その要因のひとつとして日本ではあまり馴染みのない鳥であるということが挙げられました。

かささぎという鳥は日本ではあまり馴染みがなく、小山先生によると、江戸時代に「かささぎ」という語が出てくるのは、今の佐賀県と、福岡の柳川藩だけなのだそうです。

この歌を詠んだ家持は、かささぎを見たことがなく、ファンタジーのように白い鳥だと思っていた可能性があるのではないかと考えた小山先生は、北原白秋が鶺鴒について詠んだ詩を引き合いにいただきました。

北原白秋「鶺鴒」 われは筑後の国に生れぬ

ふるさとの合歡の木かげをながれゆく水の音なり。

鶺鴒の白き下羽根、月の夜と移る空なり。

おぎろなし、おもほへば、そは眉に立つかげろふのごと。

童みな鶺鴒を追ひ、鶺鴒と影をうしなふ。

[macmillan_naruko.pdf](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary_contents/event_300309)

2018年12月9日(土)

この詩にはわざわざ「われは筑後の国に生れぬ」と書かれていて、まるで「自分は実物を見たことがある」と主張しているかのようで、いかにかささぎの実態を知っていることが珍しいことであったのが分かる例です。

イメージだけでこの和歌が詠まれたのだとすると、現代の私たちも、ファンタジーとして捉えた方が良いのではないか、というのが小山先生の説でした。



また、解釈についても一筋縄ではいきません。どのような情景を詠んでいるのかという解釈が二通りあります。

ひとつは、冬の夜空に瞬く星(きらきらした霜)を見て、かささぎの橋を連想するというもの、

もうひとつは、宮中を空に見立てて、階段をかささぎの橋を連想するというものです。

マクミランさんが英訳する際には、どちらの解釈をとるのか、そもそも、解釈を断定するのがよいのか、曖昧にしておくのがよいのかということで頭を悩ませたそうです。

このような翻訳の悩みについて、先ほどの「鵲」の英訳をとおして教えて下さいました。

白秋の詩を眺めているうちに、3種類の全く違う英訳が出来るのではないか、と思ったマクミランさん。試しに二行目の英訳案を朗読して下さいました。

1) かささぎの白い羽の先／月夜。／そして、移ろいゆく空。

The white tips of the magpie / the night of the moon / and the moving sky

2) かささぎの白い羽の先が／月の照る夜へと移動してゆく、／そんな空。

The sky of the white tips / of the magpie / flying off in moonlight.

3) かささぎの白い羽の先。／空は月の映える夜へと／移ろってゆく。

The white tips of the magpie / the sky becomes / the night of the moon

2018年12月9日(土)

マクミランさんの「どの訳が一番気に入りましたか？」という問いかけにより、会場の一体感が増します。

これほど短い部分であっても、こんなにも解釈の幅があり、まったく違う英訳が出来てしまうのだそうです。その日本語の曖昧さが、英訳の時の難しさなのだそうです。

さて、マクミランさんは問題の和歌を、このように訳されました。

How the night deepens. / A ribbon of the whitest frost / is stretched across / the bridge of magpie wings / **the lovers will cross.**

「the lovers will cross」の部分は、恋人が渡る橋という意味を大切に、マクミランさんが補われたところですが、基本的に、日本語が曖昧にしている点をそのまま活かし、英語もどちらの意味にでも取ることができるように工夫したそうです。

2-2, この和歌をどう訳しましょうか？

第1部で特に印象的だったのは、「草深き野辺には住まで機織りのぬきがたらぬか海に来たるは」(阿不幾集)の検討です。

現代ではほとんど知られていませんが、江戸時代に出来た『かさね草紙』(寛永21年<1644>以前成立)という本に登場する歌です。

まず小山先生が、「草が深く生い茂った野には住まないで、この海まで来たのは、機織りのぬき(横糸)が足りないからなのか、きりぎりすよ」と現代語に訳してくださいました。

「機織り」とはきりぎりすの別称で、「ぬき(緯、横糸の意)」が縁語なのだそうです。きりぎりすが野辺ではなく海にいる。それは機織りの横糸が足りないからなのかいと聞いている歌です。

これだけではなかなか状況が読み取れないのですが、『かさね草紙』には、次のような文章が添えられています。

太閤様、伏見より船にめし、大坂へ御くたりありけるに、いづくともなく、機織虫、舟のうちへとひ来たりけり。太閤様、面白しやとおぼしめしけん、是にて一首とありければ、細川殿詠める、

野辺に住む機織り虫の舟に来て海にくだるはぬきがたらぬかとなん詠みたまひければ、舟端をたたきさざめきたまひけり。



2018年12月9日（土）

添えられている文章（詞書き）からは、この歌が詠まれたシチュエーションがうかがえます。豊臣秀吉の船旅の最中の武将達がきりぎりすを見付けて驚き、どうしてこんなところにいるのか、と問いかけた歌なのです。

この歌については、10月23日に国文学研究資料館で行ったワークショップにおいて検討し一度翻訳しておられるのですが⁴、遊び心に満ちているこの歌が大変お気に入りのマクミランさんは、是非より良い表現を会場の皆さんと一緒に考えたいというご希望で、まずはマクミランさんの試訳を示さず意見を募集することに。



⁴ この和歌について検討したワークショップの様子についてはこちらから

フロアからは意見が出にくいのでは・・・と心配していた私でしたが、杞憂に終わりました。

「草深き野辺には住まで」の部分だけでも、3人の方から次々とご意見が出たのです。

客席に座っていたキャンベル館長からも、負けじと「きりぎりすは Grass hopper ではなく cricket の方が良いと思います」というご意見が。そして「客観的に詠むというよりも、海できりぎりすを見つけて驚いた感じを出したいので、擬人化したい。Cricket で始めて、you と呼びかけたい」という提案も。

マクミランさんはさらに「人によってたくさんの訳し方があるので、是非どんどん意見を言ってください!」と呼びかけます。

すると最初の「草深き野辺には住まで」に対応する「海に来たるは」についてもたくさんのご意見がでてきました。たとえば「live」ではなく、いるべきではない場所へ出てきてしまったニュアンスで「come out」はどうでしょう、きりぎりすなので「hopping out for」の方が面白いのでは、と、どんどん手が挙がります。

また、呼びかけている雰囲気を出すために質問のようにするのはどうでしょうか、というご意見や、日本語では「機織り」できりぎりすの意味も持つが英語では同じようにできるのでしょうかと、とい

→https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary_contents/macmillan_301_023.pdf

2018年12月9日（土）

った質問など、表現方法について触れてくださる方もいらっしゃいました。

この歌の世界観の解釈についても多くのご意見をいただきました。小山先生は、『扇の草紙』の難しさは、歌だけが示されていて、状況が分からないところ。世界観をどのように解釈するのかは、翻訳家にかかってくるのでは」と話されました。

またそのことに関して客席からも「当時も『扇の草紙』の和歌のバックグラウンドが分かる人と分からない人がいたと思うが、絵があることによって想像が補われ、解釈の幅が広がったのでは。そういう楽しみ方をされたのでは」というご意見をいただきました。



『扇の草紙』における和歌と絵の関係は、とても繋がりが深いものとそうでないものもあります。和歌を中心にして楽しむのか、絵を中心にして楽しむのか、という鑑賞の在り方についても考えを巡らせる必要がありそうです。

ここでマクミランさんの試訳が披露されました。

Dear Grass hopper, / Choosing not to be **hemmed in** living in /
by the deep grasses of the silken plain, / Why do you **loom**
before us on the sea / is it became you ran on out of thread?

「hemmed in」は取り囲まれるという意味ですが、「hem」で（衣服などの）縁をあらわす言葉になり、掛詞のようになっています。また、「loom before us」も、「機織り」と意味と、「わたしたちの前に現れる」という意味とを掛けているのだそうです（赤字部分）。

掛詞をつかうことで、元の和歌にあった遊び心を活かす工夫をされています。

また、「Dear Grass hopper」という表現をいれることによって、きりぎりすを擬人化し、おとぎ話のようなロマンチックな感じを演出されました。

この訳についても、たくさんの意見が交わされました。

キャンベル館長からは「Loom」という表現について、「おおきなも

2018年12月9日（土）

の、おどろおどろしいかんじのものが迫ってくるイメージがあるが、きりぎりすに使ったのはなぜか」という質問が。マクミランさんも悩まれた部分だったそうですが、きりぎりすに向かって「なんでお前はここに来たのか」という仰々しさをコミカルに表現するために、あえてこの表現を選ばれたのだそうです。

また、海をどのように捉えるのかということも議論になりました。海が開放的な空間というイメージは近代的な捉え方で、当時は恐ろしい存在であったのではないか、というものです。

小山先生は、古典の世界における海が必ずしもマイナスイメージだけを背負っているわけではないが、「うみ＝倦む」、いやになったという意味も掛かっているように思います、検討が必要です、という見解を示されました。

すると客席から、繊維をより合わせて糸をつくることを「うむ」と言いますが、この意味も重なっているのでは、というご指摘が。

マクミランさんは、掛詞のところは、違う意味を同じような音で表現できるように工夫していたけれども、sea に糸をつくる意味の「うむ」を重ねることは出来なかったところですが、工夫が必要です、とおっしゃっていました。

今回の訳は以前拝見したバージョンからは随分変わっており驚いたのですが、このようにさまざまな角度から何度も検討し、推敲しておられるのだなあとお納得しました。

マクミランさんは、ないじえる芸術共創ラボでの取組について、ワークショップなどで研究者の意見を聞くことで、翻訳する上で細かいニュアンスを理解しかねるところを補い、より正しい知識のもとで考えることが可能になっている、とおっしゃいました。

精緻な研究とマクミランさんの工夫のうえにできた翻訳を一度開放して、さまざまな角度から再検討し、魅力や問題点について考えることができたワークショップとなりました。

3, 第2部—扇はどちらに翻るか—

今回のイベントには、和歌を様々な角度から楽しんでいただきたい、というテーマがあります。

今でこそ日常生活から遠い存在に思えますが、もともと日本人の生活と深く結びついていた和歌。想いを伝えるツールとしてだけでなく、遊びの要素も持っています。『扇の草紙』も謎解きのようなゲーム性がありましたし、現代でもお馴染みの百人一首もそうです。

せつかく畳のある広間で開催するのだから、和歌を使った遊びを体験できるような企画があっても良いのでは、と考え、第2部では英訳百人一首カルタをつかい、和英歌合を催すことにいたしました。

歌合せとは、左方と右方にわかれ、お題にしたがってそれぞれ即興で和歌を詠み、判者によって勝敗を決するという日本の伝統的な遊戯ですが、ここでは特別ルールを適用しました。

2018年12月9日（土）

まず判者が百人一首カルタ（任意の五枚）のなかから一枚引き、選ばれた歌を、左方には日本語、右方には英語で朗詠します。左右にはそれぞれ白拍子⁵が控えており、歌の心を胸に舞います。

左右それぞれの読みぶりと、舞との親和性を基準として、観客のみなさまには良いと思ったほうに拍手をお送りいただき、判者が最終的に判定を下します。

判者にはキャンベル館長、左方には弘道館代表理事の太田^{とおる}達さん、右方にはマクミランさんが立ちました。



⁵ 白拍子研究所の遙御前（左方）、小虎御前（右方）にご出演いた

まず一番目、判者がひいたのは「み吉野の山の秋風小夜ふけてふるさと寒く衣打つなり」。

左方の太田さんが日本語で読み上げた後、まずは遙御前が謡いながら舞を舞います。続いて右方のマクミランさんは、ご自身の英訳「A cold mountain wind blows down on the old capital of Yoshino, and as the autumn night deepens I can hear the chilly pounding of cloth being fulfilled.」を朗詠し、それにあわせて小虎御前が舞いました。



だきました。

2018年12月9日(土)

会場からの拍手は甲乙付けがたく、判者の判定に任せることとなりました。

判者が述べる勝敗の理由を「判詞^{はんじ}」といいます。

右方の舞については「小夜更けて」のところでさっと冷たい風が吹き抜けたような感じがして、「歌の心を胸に」という点が素晴らしい、という評。右方は、マクミランさんのアイルランド地方の英語のソフトな発音が、和歌朗詠にふさわしいという評で、判者の扇は右方に翻りました。



二番目は「心あてに折らばや折らむ初霜の おきまどはせる白菊の花」(マクミランさんによる英訳: To pluck a stem I shall have to guess, for I cannot tell apart white chrysanthemums from the first frost.) の勝負で、左方の勝ち。

三番目は「由良の門を 渡る舟人かぢをたえ ゆくへも知らぬ 恋の道かな」(マクミランさんによる英訳: Crossing the Bay of Yura the boatman loses the rudder. The boat is adrift, not knowing where it goes. Is the course of love like this?) の勝負で、右方の勝ち。

四番目は「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の 長々し夜をひとりかも寝む」(マクミランさんによる英訳: The long tail of the copper pheasant trails, drags on and on like this long night alone in the lonely mountains, longing for my love.) の勝負で、右方の勝ち。総合では右方の勝ちとなりました。

第2部も、白拍子のお二人の衣擦れの音が聞こえるほど静まりかえり、固唾を呑んで舞を見守ってくださったり、たくさんの拍手で応援してくださったりと、会場が一体となり、日英の和歌を楽しんだ時間となりました。



2018年12月9日（土）

4, 多言語化することによって見えてくるもの

このイベントをとおして見えたことについて、キャンベル館長に総括していただきました。

私たちは多くの場合、和歌を文字として認識しています。

第1部では、言葉の垣根を越えることでどのようなものが見えてくるのかを、会場一体となって考え吟味しました。

第2部では、ふたつの言語に加え、身体表現としても和歌を味わい、三層に重なった高みの上から、いにしえの人の和歌について考えました。

言葉から声へ、声から身体へ、その先へ、という体験をしたことで、いまないじえる芸術共創ラボで目指している未来の在り方—研究のその先に、古典があらゆる人間の営為と結びついてゆくこと—へとつながる糸口が示されたのではないのでしょうか。

また、ないじえる芸術共創ラボではこれまでいくつかのイベントを行ってきました。最初は活動の発信をしたい、知っていただきたい、という気持ちが大きかったのですが、弘道館という場で会場と一体になったことにより、イベントは交信の場と考えることができるのではないかと感じました。

一方的に情報を発信するのではなく、ひとつの和歌が、会場内で

何往復もすることによって、ひとつの歌、言葉、事象に肉薄してゆくという経験により、縁あって集まった人たちのさまざまな知識や好奇心が、ないじえる芸術共創ラボと交信し、一緒に何かをたててゆくことができます。

成果だけを発信するのではなく、その過程で杭をたて、様々なひとや縁とつながり、ひろがってゆくことの面白さ、大切さを実感し、私たちにとっても実りあるイベントとなりました。



※なお、本イベントの動画を、ないじえる芸術共創ラボのWEB上にある「これまでの活動」⁶のページで公開していますので、是非ご覧ください。

⁶ <https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/past/index.html>